

白蛇大神のこと

その昔、女神山ろくに数人の作男と下婢を使い、大きな屋敷を構えた豪農があつた。

ある夏の夜のことである。主人長兵エも使用人達も既に寢静つた丑三つどき、長兵エは素足に何かヒヤリとさわつたものがあるのに目を覚ましガバツとはね起きた。片方の足がひどく重い。家の子郎党を呼び起し、灯りをともした。長兵エも郎党もアツと腰を抜かさんばかりに驚いてしまった。

なんと体の真白な太い蛇が幾重にも足にからみ鎌首をもたげて長兵エをにらみつけている。長兵エはこれは大へんなことになつたとなんども足を振って振り落そうと焦つたが、蛇は離れるどころかますます巻いた力を強めるばかりである。業を煮やした長兵エは、そのまま土間に掛けてあつた磨ぎすました鎌をもって外に出た。それでも蛇は離れようとしない。長兵エやにわに鎌をもって、蛇を下からザクツと切り上げた。バラバラと切れた蛇が落ちていった。

長兵エは薄気味悪い、眠れぬままに朝を迎えた。そして夕べ切り落した白い蛇を見るため外に出た。途端に長兵エ驚きの大声を上げてしまったのである。それもその筈、昨日はそれ程大きな大蛇とも思わなかつたが、なんとそれがタンガラで七ツ半はあろう大蛇になつていて小山をなしていたのである。

長兵エは、後の崇りを恐れ一族をあげて手厚く葬り三尺四方の土盛りをしこれを「蛇塚」とした。しかしその後も白蛇の怨霊が出て悩まされ災が絶えなかつたのでこれを「蛇類明神」とし、長兵エ一家の氏神であつた稻荷様と合せて祀つた。その後もなんとしても明神満足がしなかつたので、更に「白蛇大神」と改め